

令和 2 年（2020）第44回島根県高校演劇発表大会講評

洲浜昌三

44回大会は10月30, 31日、県民会館で13校が参加して開催されました。コロナ禍のため無観客で行われ開会式、講評、閉会式もなし。後日講評を文章で送って欲しいと言われ、講師(野村みさ子、坂井陽介、洲浜昌三)は文章で事務局へ送りました。以下洲浜が送った講評です。参考までに紹介します。舞台写真を挿入すると分かりやすいのですが、残念ながらありません。

上演 1 三刀屋高校 『異説 ヤマタノオロチ』 亀尾佳宏 作

古事記や出雲風土記を素材にして、スサの国を舞台に、「真の豊かさとは？」と問いかける高校演劇のレベルを超えた異色の優れた脚本です。独自の地域性を素材にしなが、普遍性も秘めている脚本だと思います。オト、オロ、ヤマタ、アシナ、民衆の間で交わされる会話は、「現代疑似シェークスピア三刀屋版」です。すべて虚構でありながら、あちこちにある言葉遊び、集団群舞、現代の社会や政治を象徴し風刺する台詞があつて、1400 年前のことでありながら現代性があり、観客を引き付けます。高校演劇を越えた社会性、一般性があり、2012 年の高校演劇全国大会で上演後も何度も各地で上演されたのも頷けます。タキガミヤがどんな国か、オロはどんな状態の国から何故、どうして来たのかななどが、もう少し分かれば、リアリティや説得力が増すのではないかと、思いました。

- 集団演技、群舞、無言動作などが見事で観客を引き付けた。
- 数多い場面で、照明や音楽、効果音などが効果的に使われ場面が生きていた。
- 発声や滑舌などはかなりよかったが、早口で会話をやり取りする時には、言葉が分かりにくいところもあちこちにあった。早口でも何を観客に伝えたいかを考え「言葉を立てる」訓練をしてほしい。
- オロがオトに殺されると思わせ、舞台中央奥で王が刺殺される場面には意表を衝かれ、感心した。
- 全体に集団演技が際立っていて、終わってみると人物が埋没した印象が残る。人物の苦悩、勇気、気迫、葛藤など内面的なものがもっと出れば劇が生きてきます。
- 不思議な世界、神秘性、山の奥深さ、古代性等の雰囲気を出すために、スモーク等も効果的。
- 言葉遊びの面白さはもっと生かしたい「言葉を立てる」。「ヤフー検索」はちょっとやりすぎかも。
- 今回のラスト場面は、台本を変更されたのでしょうか。オトは死に、オロが王になると受け取った人も数名ありました。テーマに関わる場面なので検討したい。この劇で掛詞は重要な役目を果たしています。ラストの「スサの国の王、スサノオだ」の決めセリフカットがいいか、どうか。更に、「外伝」か「異説」か「異伝」か。誤解を生む可能性があるので明確に区別したい。

上演 2 松江農林高校 『フリージャ』 山田沙弥 作

身近な親子の問題を正面に見つめ、高校生らしい視点で書いた誠実感のある創作です。父は単身赴任、母は子育てに熱心なあまり、いつもイライラして怒ったり説教したり、時に手を上げることもあります。その母も精神的な問題を抱えていたという構成にはリアリティがあり、いい着想だと思いました。残念なのはその劇の構造を十分生かし切れなかったことです。場面が多すぎて劇が細切れになったこと、ラストのハッピーエンドが安易すぎました。劇は「激」です、山場ではもっと激しくぶつかりと感動も深まります。ちょっと中途半端でした。

- 劇中の母とユウナのやり取りに迫力がある場面もありました。母の声はよく通り、ユウナの声は今一歩でしたが雰囲気がありました。

- 装置を含め場面設定が曖昧だったことが最大の弱点でした。部屋の場面に竹が組んでありましたが、農場の感じがしました。出だしは舞台上手側に 4 人が一列に立って会話、下手側には 3 人が立っていましたが、同じ照明が当たっていて、両者の関係や場所もわかりませんでした。持ち物などでどんな人物か、どこで会話しているのか観客に分らせる工夫をしたい。
- セリフの中では、どの言葉が大切かをしっかり押さえ、その「言葉を立てる」ようにしなければ、全体がフラットになり、何を伝えたいのか観客に分かりません。
- 装置や小道具、場面がもっと工夫し山場をしっかり演じたら、面白い劇になったでしょう。

上演 3 松江北高 『夏休みシルバー電話相談室』 原田夢子 作

軽快な音楽で緞帳が上がると、舞台中央に、まとまった明るい部屋と装置。肩の力を抜いた自然な夢子とあかりの会話 — 快調で心地よい幕開けでした。高校生が夏休みに高齢者相手に電話相談をするという設定も、楽しいことが期待されて good idea でした。いい場面設定からは、いい劇が生まれます。残念だったのは、この面白い設定を十分生かせなかったことです。あかりの祖父、良雄が電話相談する設定ですが、台本を読んでいない人には分らなかった可能性がありますし、それが面白い方向へ発展せず、平凡な結末に終わりました。健太の登場は面白いのですが、ストーリーとしては味付け役なのに、場面に絡みすぎて劇の遊びが多くなり過ぎました。main stream は、しっかり押さえて脚本を書かないと、観客はやがて退屈します。

「夏休み子ども電話相談室」という番組がありますが、小学生が、とても楽しく素敵な解答をして人気があります。もっと相談する人数を増やして、とんでもない質問などに、高校生らしい頓智のある意外で面白い答えをすれば、劇が引き締まり楽しくなったかと思います。

- 進行係が掲示板に書いた文字を見せて二人の相談員に伝える、という手法も場面が単調に流れるのを切断する意味でも good idea でした。更に効果的にするためには、進行係もガラス窓越しに二人を常に見ていてジェスチャーもしながら掲示板を示せば面白く緊張感が生じたことでしょう。
- 暗転が長すぎて、どうしたのか、と思う場面があった。
- 同じ場面が 17 分続くところがあったが、変化や展開がないと劇がフラットになる。
- 英語の相談はよかった。中国語かベトナム語の相談があったら面白い（と思わず欲がでました）
- 自動販売機は一瞬本物！かと思った。観客をビックリさせるのも演劇の楽しさですね。

上演 5 情報科学高校 『get over』 菅原悠人 作

舞台装置はなく、4 人が舞台上で距離をとって椅子に座り、独白したり会話を交わしたりしながら劇ストーリーが展開されていく作り方は、とても興味深かった。椅子の座り方、向きなどによって人物の内面や人間関係が表現されるのにも感心しました。だんだん問題が明らかになり、精神科の先生から悩みを持つ 4 人が集められた場所で監視カメラも設置されているということもわかってきます。各自の精神的な問題や家庭内の問題を語り、それを get over、乗り越える、克服する、というのがテーマなのですが、後半の解決の仕方が安易で説得力がありませんでした。それは、言葉だけで get over しているからです。この脚本は、インターネットから取得した脚本だと思います。というのはネット脚本特有の特徴があるからです。それは、「発想や構成は奇抜で独自性があり面白いが、作為的、観念的、人工的に物語を創り上げる傾向が強い」ということです。

- 4 人の会話のやり取りには迫力がある場面が多かった。
- 4 人の関係や内面を椅子の座り方によって表現したのはよかった。言葉による表現以上に、身体表

現でいろいろなことを伝えられるのが演劇の特徴です。

- 冒頭の 4 人の独白場面で、一人一人が喋る言葉の終わりに、本人ではないセリフがあるが、その区別が明確でないので、何のことか分かりにくい。動作や表情も変化してはっきり区別して喋りたい。
- 意図的なのか、うまく操作ができなかったのか不明だが、なぜか暗転が長いところがあり考えた。
- 言葉中心の観念的、人工的な骨が見える劇を取り上げる場合、装置、小道具、照明、場面、動き、効果音などをフルに生かして肉付けして豊かにして骨を隠さないと情感や感動が薄くなります。

上演 6 松江商業高校 『桜井家の掟』 阿部 順 作

緞帳が上がると、舞台中央に部屋が組んであり、テーブルや椅子が置かれ、部屋の中央奥に窓ガラスがあります。次女の蘭が携帯電話でぶっきらぼうに話し始めます。いい装置で、蘭も超ヤンキーらしい荒っぽさがよくでていて、期待を持を持たせました。窓の外の動きやオートバイの音なども伝わってきて劇の背景が広がり、とてもうまい処理だと思いました。この劇は全国大会でも上演され、その後各地で上演されている定評のある作品です。前半は抱腹絶倒を仕組んだコメディ、後半はしみりした悲しいトラジディです。前半はもっともっと思いついて臨場感を持って演じないと、笑わせようと仕組んだ台本の骨がみな見えてきます。そのうち蘭も普通の高校生になってしまいました。各人物はみなオーバーに個性的に設定されていますが、それをうまく表現しないと、笑いの底が見えてきます。喜劇は面白いけど、演じるのは難しい。

全体的には脚本の特徴を理解してうまくまとめていたとおもいますが、問題は前半の処理です。コメディでありながら観客がほとんどいないという点では客席の反応がゼロで、不運だったと思います。

- 装置は工夫してよく作ってあった。音響効果もよかった。
- 初めてこの劇を観る人は、なぜ芝居がかった演技をするのか分かりにくいと思う。日常の人物としてリアルに演じるのか、コメディと割り切って思いきって演じるか、それとも両方の折衷か、はっきり決めて演じないと中途半端になり、後半の悲しみが十分浮かび上がらない。
- ラストで両親のシルエットが窓に浮かぶが、明確な意図を持って出さないと、単なる思い付きに見える。何を観客に伝えたいのかラストだからしっかりしたメッセージを伝えたい。声があってもいい。

上演 7 大社高校 『昭和みつばん伝』 タカハシ ナオコ 作

舞台上で大きな発展や展開がない女性二人だけの会話劇なので、下手をすると退屈な劇になる可能性もあります。二人だけの会話劇ですが、背景では戦争が進行していきます。歌舞伎役者志望の兄が兵隊として戦地に赴き、内地では空襲が激化、勝子たちは広島へ疎開、原爆という悲惨な歴史が進行中での会話です。楽しい話や、落語、などさまざまなエピソードも出てきますので、それをどのようによく会話するかが、この劇のポイントです。そういう点では、工夫がみられましたし、明かる性格や茶目っ気な場面などもうまく表現していました。

二人の関係や会話をうまく表現したら、やりがいのある脚本だと思います。

- この劇は戦前の東京の上流家族の家で、そのお嬢さんと女中だということをしっかり押さえて劇づくりをしないと、リアリティが希薄になる。そういう点で、たち机と椅子はふさわしくない。できればソファにして、面と向き合わない配置にする。観客には横顔しか見えず、会話も二人だけの世界に狭く収まってしまう。

- 衣装は和服がいい。女中は和服の上にエプロンなど。お嬢さんと女中の違いから生まれる面白い会話があちこちにある。そのためには視覚的にも喋り方にも動作、身振りにその差をしっかりとだしたい。
- 落語の場面があるが、本物のようにしっかり演じて観客をびっくりさせたい。
- 冒頭の臨時ニュースは、もっと緊迫感がほしい。本物を録音して流してもいい。
- たくさんある会話を覚えて、自然に演じた点では好感を持ちました。

上演 8 掛合分校 『魔術』 芥川龍之介作 亀尾佳宏 潤色

普通の朗読かと思っていましたが、意表を衝く演出で、幕開きから新鮮な感動を覚えました。台本を手にして順番に朗読するのではなく、平台や箱足を使って高低差を出し、ステージスポットやサスペンスライトをうまく使用して舞台を立体化したのも大成功でした。照明、音響、装置、小道具なども生きていました。特にバケツや箱などを叩いて変化や緊迫感などを表したのも good idea で、劇が生き活きとしました。更にマストラなど重要なセリフは朗読ではなく、覚えて視線を舞台に向け、劇として語り伝えたのも見事でした。

残念だったのは長めの朗読の部分です。スピート感のあるフラットな読み方でしたので、大切な言葉もフラットな流れの中で埋没してし、進行している場面の解説になってしまいました。早口で朗読しても重要な箇所は「言葉を立てる」工夫をしないと単調になり退屈してきます。

たまたまある中学校の全校劇が文化祭で『魔術』を発表するために、数回指導に行きました。朗読ではなく、テーマを芥川龍之介の『魔術』から援用した会話劇ですが、著名な文学作品にはレベルの高い問題意識と言葉に気品があります。そういう点でもこの作品を朗読劇にして発表されたことに拍手したい。今後他校が朗読劇を上演するときのモデルになり、参考になります。以下メモより寸評。

- 各場面が単調に流れず、変化しながら展開される演出は見事だった。
- 装置や小道具などありふれた物を使用し、それを適切に生かし、生き活きとした舞台になった。
お金を表す銀色の皿（何だったのかな？灰皿に見えたけど）は特に効果的だった。
- 暗転時に舞台の上で次の準備をするのが見えるのも不自然ではなく、よかった。
- 朗読が解説、説明にならないように、進行する舞台の流れの中での朗読（というより劇中の一部）になれば、全体がうまくまとまったと思う。

上演 9 横田高校 『20205678』 伊藤靖之 作

とても新鮮な舞台で感動しました。文字を書いた大小数多くの箱（何個あったのかな？）による表現はまさにコロナ禍で会話出来ない状況の象徴そのものでした。声は音ですから、客席に伝わるのに 0,3 秒前後かかります。しかし文字は視覚ですから taime-lag なし、同時に伝わります。しかも同時に複数の文字が伝わります。劇がシャープになり、効果は抜群です。音楽の選択も、照明も問題なく、ダンスや群舞も見事でした（誰が指導しのかな、部員の中に習っている人がいるのかな、それともイトウさん！？マサカ？ゴメン！）

それぞれのエピソードは素敵です。欲を言えば、各エピソードを貫く一本の棒、バックボーンをもっと頑丈にたくして欲しい。エピソード場面の並列（横並びではありませんが）では劇の魅力が半減します。縦の線は演劇部です。特に閉じ込められている先輩です。そして、ラストで爆発するかのよう演劇部員が躍動的に発表することです。声は出さなくてもダンスや群舞と文字で。「雨にもマケズ」が重要な役を果たしていますが、できれば、みんなで考えた独自の言葉が欲しい。いい劇だっただけに更に欲がでてきました。以下、メモから寸評を箇条書きにします。

- 箱に囲まれて閉じ込められている先輩は、前の方も箱で閉じ込めた方がいい。閉塞感。課題の山も箱に、英語課題、数学課題・・・などと箱で示した方がいい。
- 箱をみんなで蹴散らす場面は迫力ある山場でよかった。もっと激しく暴れてもいい。
- 箱に書いてある文字をそのまま読むと説明になる。説明不要、押し付けは敵。
- ビニールコートを着た医者が無言で人を別け、連れ去る場面は秀逸！
- いつもながら台本の最初に、「あらすじ」「要旨」「登場人物」など詳しいのは最高！部員と顧問だけ分かる台本はまずい。第三者にもよくわかる台本は重要で有難い。

上演 10 安来高校 『望むまま』 妹尾京香 作

二人の高校生の会話を中心に成り立っている劇で、二人の微妙な心理的なやり取りが面白く書かれている創作脚本ですが、舞台上で実際に演じる場合には、同じような場面での同じような会話が何度も出て来るので単調になり観客を引き付けていくのは難しい。望海と夏帆の発声はよくて言葉もよくわかったが、心理的な内面の喜怒哀楽はもっと表現しないと単調に流れてしまいます。

脚本を書くのは大変な知的作業です。作者に敬意を表したいと思います。妹尾さんはこの脚本を書く時、パソコンに向かい、会話で小説を書く意識で書いたのではないのでしょうか。「観客の目」が同時にないと単調に流れます。同じような場面や会話が続くので観客は退屈します。最大の山場（起承転結の転）では激しい対立の衝突が見所ですが、そのクライマックスでのぶつかり合いが弱い。お客さんを引き付けていくためには、様々な仕掛けや工夫が必要です。以下寸評です。

- 教室の場面で二人だけの机を並列しただけでは雰囲気が出ない。工夫したい。その教室の場面で使用した机を、家の場面で使うのは不自然。
- 人数が少なく装置もほとんどなく、多く場面転換も多いので、照明や音響効果をもっと利用したい。簡単に移動できるパネル版や置物、釣りものなど工夫してその場を分かりやすく豊かにしたい。
- 20 ページ、26 ページの母や望海の対立はもっと激しく演じたい。劇は激です。
- 無言劇の場面での音楽は効果的だった。ラストの朝の教室も動作だけで表現した場面無言劇だったが、テーマの意図が伝わり、効果的で生きていた。

上演 11 松江工業高校 『ワールド エンド』 緋村カズキ 作

新型コロナウイルスパンデミックで世界中が危機的な状態にある中で、この脚本は、それを連想して書かれたかのような世界です。冒頭のアナレーションで「滅びゆく世界。木々は枯れ、砂漠は町を飲み込み、流行り病が次々と人々を手にかけていく〜」。千年生きている錬金術師や命を吹き込まれて数百年生きている人形のシンなどが登場する虚構です。部分的には工業らしい、創意工夫のある、しっかりした場面がたくさんありましたが、脚本の限界を感じました。一読して、ネット脚本だと思いました。情報科学高の『get over』でも書きましたが、「発想や構成は奇抜で独自性があり面白いが、作為的、観念的、人工的に物語を創り上げる傾向が強い」。その虚構から感動的な真実（嘘から誠）が出てくればいいのですが、それぞれの必然的な関係性が乏しく、どうしてもマンガチックな辻褄合わせの印象が残りました。以下、メモより寸評です。

- 熱演だが、観念的な作品なので頭で理解できても、感動までいかない。
- 言葉ではなく無言で表現する場面が効果的で生きていた。
- プロジェクターで投影された映像はとても効果的だった。会話中心に作られた劇なので、平板な会話場面が長く続くと観客は退屈する。映像は虚構の世界を視覚化しリアリティを生み出すので、もっ

と多用してもよかったかもしれない。

●ラストの大きな木の映像はよかったが、劇のテーマから考えると大きな木の森がふさわしいかもしれない。大きな木の背後に一面の森が見える映像。前半でも砂漠に小さな木がある映像を出しておく、ラストの大木が効果的になる。布石の効果です。

上演 1 2 出雲高校 『白い天秤』 出雲高校演劇部2020創作

部員で議論しながら出来上がった脚本だと推測します。人間関係の対立や難しさを若者らしい視点で描き、劇としての構成もまとまっています。登場人物も典型的でなくそれぞれの個性があって、その人間関係から生まれる会話も面白く、多角的な視点が伺えます。部員で議論しながら創作した成果だと思います。

脚本を読んだ時のメモを書き写してみます。1、訴えたいテーマが明確ですっきりしている。2、ドラマに必要な対立という骨格があるとともに、対立を乗り越えようとする方向性もある。3、身近な学校生活を取り上げ人物が生きているのでセリフにリアリティがあり生き生きしている。良い脚本だとも思いましたが、人数がもっと多いと迫力のある場面が創れたと思います。またラストは自然な終わり方ですが、一工夫すると感動が生まれる可能性があります。以下細切れ寸評メモです。

●自然な喋り方はいいが、場面によってはもっと思い切り声をだして客席へ思いを届けた方がいい。でないと劇が舞台内の世界に納まってしまいかねない。

●踊りの場面はとてもうまく、劇としても不自然さがなくとてもよかった。もっと見たい！

群舞や *silent motion* は一般生徒の個性的な伸び伸びとした発送や行動を表現していて、とても面白い演出だった。

●舞台の先端に座って弁当を食べる場面も変化があり、声もよく聞こえ身近に感じられて good!

●美しい苦悩や友人との対立、軋轢は、もっと強く出てきてもいい。

●人数が 10 人くらいいけば、ラストは見事な合唱で終わってもいいかも。(勝手な妄想なり)

上演 1 3 松江南高校 『きたくぶ』 松江南高校演劇部 作

創作脚本ですが、何を主題(テーマ)にして書きたいのか掴みにくい脚本でした。様々な理由が考えられます。劇の骨格(例えば起承転結)等の組み立てや構想を練らずに、思いつくままにどんどんパソコンに打ちこんでいった。そのために平板な会話だけが先行し長々と続き、山場が劇の半ばを過ぎてやっと頭を出した。劇の 5 分以内にはテーマが布石として出て来ないと 60 分の劇では観客が退屈してしまいます。小説を書くようにどんどん書いて(打ち込んで)いったので、観客の視点が欠けていて、平板な状態が長々と続いた。時間がなくて、部員で読み直し批判するという第三者の客観的多数の視点を取り入れて検討、修正をほとんどせずに練習し上演した。後半になってやっと川上が、不登校の原因を話しますが、話さざるを得ない必然性その前に布石されていないので、思いつきのような軽さしかない。カケルが病気を抱えていたのなら、死ぬ前に、それを観客に分からすような布石が置いてないと、作者の単なる思いつきで死なせたように観客には見えます。伸び伸びと演じて好感が持てた舞台でしたが、脚本は命ですね。(Excuse my thoughtless remarks 妄言多謝)

以下、メモより寸評です。

●伸び伸びと演じていて気持がいい。

- ラストの場面は台本を大幅に変更したのだろうか。
- 会話で成り立っている劇だが、場面によって人物によって客席へはつきり言葉が届かない時がある。観客が置き去りになり、劇が舞台内だけの世界になるので、観客の視点で演じることも必要。
- 最初に川上がロッカーから出て来る場面では、観客をびっくりさせようとする演出かと思った。不登校で隠れていたとすれば、もっと演技方やみんなの反応も違うはず。ここは重要な布石である。
- キタクブという発想は面白いが、もっとキタクブらしいことをしなければ面白くない。普通過ぎる。
- カケルが急に志望するのは取ってつけの感がある。もっと前からそれを暗示させておきたい。